

# 英語コーパス学会 Newsletter № 63

Dec. 1, 2008

■会長: 赤野 一郎  
■事務局: 〒175-8571 東京都板橋区高島平 1-9-1 大東文化大学 山崎俊次研究室内  
■TEL: 03-5399-7372 ■郵便振替口座: 00940-5-250586 (英語コーパス学会)  
■URL: <http://muse.doshisha.ac.jp/JAECS/index.html> ■E-mail: [yamazaki@ic.daito.ac.jp](mailto:yamazaki@ic.daito.ac.jp)

**JAECS**  
Japan Association for English Corpus Studies

## 第 32 回大会報告

### 概要

英語コーパス学会第 32 回大会は、10 月 4 日(土)、東京外国語大学府中キャンパスで開催されました。JR 新宿駅から中央線武蔵境駅乗換え西武多摩川線多磨駅下車で約 35 分の立地条件の良さもあって 102 名の参加がありました。

午前中のワークショップは“From Language Analysis to Language Simplification with *AntConc* and *AntWordProfiler*”と題して Dr. Laurence Anthony (早稲田大学) に講師を務めていただきました。まず伝統的なコーパス分析の手法が、英語学習者にどのような語彙的情報をもたらし、そしてそれらの知識が ESP の学習状況に如何に活用されるかを解説された後、利用が容易で無料ソフトウェアである講師自ら開発された *AntConc* と *AntWordProfiler* の使用方法の懇切丁寧な実習を行っていただきました。特に、公開されたばかりの *AntWordProfiler* は、使いやすしいインターフェースを備え、英文を学習者の語彙レベルに合わせて簡単に改変できるので、*AntConc* 同様、使用が広まっていくものと思われます。参加者は 48 名で、非常に有意義なワークショップであったという感想をいただきました。アシスタントとして投野由紀夫先生(東京外国語大学)、小林雄一郎先生(法政大学)、石井康毅先生(東京理科大学)にお世話になりました。講師、アシスタントの先生方にこの場をお借りしてお礼申し上げます。

午後の大会では、まず赤野一郎会長(京都外国語大学)の開会の挨拶があり、その後、開催校を代表して小林二男先生(東京外国語大学副学長)にご挨拶をいただきました。引き続き学会賞の

選考委員長の深谷輝彦先生(椋山女学園大学)から学会賞の発表と選考理由の説明があり、下記のような結果となりました。

### 第 7 回英語コーパス学会賞

#### 学会賞

受賞者: 中條清美氏(日本大学)  
受賞対象: 英語学習語彙研究とパラレルコーパスを利用した DDL に関する研究

#### 奨励賞

受賞者: 後藤一章氏(大阪大学大学院)  
受賞対象: コーパス解析ツール GoTagger と CoOccurrence の開発と公開

研究発表は、第 1 室で 3 件(人称代名詞、句動詞、文法化)、第 2 室で 3 件(形容詞強意表現の習得、中間言語、語用論)の発表がありました。シンポジウムでは石川有香先生(名古屋工業大学)の司会のもと、「ESP におけるコーパス活用の意義と課題」というテーマで、3 人の講師の先生方に発表していただきました。英語教育のみならず、社会言語学や語彙意味論等の研究分野において ESP テキスト分析が注目を集めていることを発表され、有意義なシンポジウムでありました。午前中のワークショップ、午後の研究発表、シンポジウムの概要は司会を担当された先生方にご執筆いただきましたので、下記の 研究発表 と シンポジウム をご覧ください。

大会終了後の懇親会には 45 名の参加があり、木村恵先生(獨協大学)の司会のもと、赤野一郎会長の挨拶、三浦省五先生(福山大学)の乾杯のご発声で懇親会が行われました。研究発表、シンポジウムの更なる意見交換、会員同士の交流と情報交換で盛り上がり、午後 8 時にすべての大会行事が終了いたしました。

開催校責任者の投野由紀夫先生のご尽力とご協力で盛会に終わったことを喜び、厚くお礼申し上げます。また午前中のワークショップ、大会の受付等で献身的にご協力いただいた東京外国語大学大学院生の皆様にも紙上をお借りして厚くお礼申し上げます。

## ワークショップ

### From Language Analysis to Language Simplification with *AntConc* and *AntWordProfiler*

Laurence Anthony (早稲田大学)

Since the 1960s, corpus linguistics tools have been used to identify the fundamental building blocks of languages through the analysis of ‘authentic’ or ‘natural’ language usage. Indeed, many experts include the term ‘authentic or ‘natural’ language as part of the definition of corpus linguistics itself. However, in recent years, the scope of corpus linguistics has broadened to include studies of ‘inauthentic’ language use that nevertheless offer insights into new language teaching approaches. For example, recent studies on learner and textbook language have revealed aspects of languages that are particularly difficult for learners, and also suggested more effective ways to sequence teaching points in classroom materials.

Following a similar trend, vocabulary studies have also moved beyond more theoretical aspects of vocabulary acquisition and the representation of vocabulary in the mind to now include those that focus on practical approaches to vocabulary teaching and learning in the classroom. Interestingly, many of these new approaches have been informed by corpus-based studies. Also, there is now strong evidence showing that classroom materials with a controlled or simplified vocabulary range can be highly effective. Again, the research on vocabulary has demonstrated that corpus linguistics and ‘inauthentic’ language use are not mutually independent.

In the first part of the workshop, I plotted the trends in corpus linguistics and vocabulary studies over the past fifty years, and discussed how both

fields have contributed in the development of new ESP language teaching materials with a carefully controlled vocabulary range. Using *AntConc*, a powerful but user-friendly corpus analysis program developed by the presenter, the workshop participants then investigated some of the unique features of political science research articles, as an example of how such tools can inform ESP teachers and learners about language usage in specific disciplines. In the final part of the workshop, I introduced a new tool called *AntWordProfiler* that works smoothly with *AntConc* to provide a detailed analysis of the vocabulary complexity of target texts. Applying this tool to textbook materials created for a political science ESP course, the workshop participants learned how to assess the difficulty of the materials, and also how the tool can be used to simplify the materials for different student levels.

*AntConc* and *AntWordProfiler* are both freeware, multiplatform software programs that can be downloaded from the presenter’s website.

## 研究発表

### 英国高級紙社説における人称代名詞— Involvement と detachment

三木 望(大阪大学大学院)

本発表は、*Times*, *Guardian*, *Independent*, *Daily Telegraph* の社説コーパス(各約 30 万語)を資料に、人称代名詞の用法を分析し、各新聞社の社説の特徴を考察したものである。研究方法としては、人称代名詞ごとの分布傾向を捉えるのに対応分析を用い、左右の共起語に関してその使用頻度と G-score の算出及びコンコーダンスラインでの質的分析を行った。まず、人称代名詞の分布傾向から、*Times/Guardian* のグループで *we* の使用頻度が低いという傾向と *Daily Telegraph* で *you* の頻度が高いという傾向が伺えた。さらに、*we* との共起語の分析から、*Independent/Daily Telegraph* のグループでは *should/must* といった強調を表す助動詞が多く用いられており、特に、*Independent* においては *need* の頻度が際立って高く、*we* と同時に用い

ることにより読者を巻き込みながら主張を展開している様子が見られた。また、*Daily Telegraph* の you は、if/when の条件節内で用いられることにより、読者を仮想世界に封じ込め、社の自己主張を展開するという手法として有効に機能していることも分かった。なお、Exclusive WE / Inclusive WE 及び共起する動詞の種類分析から、*Times* < *Guardian* < *Daily Telegraph* < *Independent* という読者の Involvement に関する度合いの違いが見られたという指摘は本発表の成果の一つである。

質疑応答では、統計の検定方法に関する確認で、今後 one-way ANOVA やカイ二乗検定を組み合わせて行いたい旨の回答がなされた。また、we と共起する動詞の that 節が表す命題の特徴についての質問では、we hope の場合は命題について確信度が低い場合に使用されるという回答がなされた。

保坂 道雄(日本大学)

#### 句動詞における動詞と不変化詞の結合特性について—対応分析を用いた考察

杉森 直樹(立命館大学)

本発表は、BNC を用いて動詞と不変化詞(副詞)の結合について、その規則性の有無や特性の分析を行い、句動詞学習への応用の可能性をも論じたものである。研究方法としては、BNC より抽出した動詞+(代名詞)+不変化詞のデータをもとに、*Longman Dictionary of Phrasal Verbs* 等の句動詞辞典を利用し、750 語の高頻度句動詞リストを作り、Biber *et al.*(1999)や投野(2004)のデータを参考に主要な動詞 20 語と不変化詞 15 語を選び出し、分析を行った。その結果、以下の5点が明確となった。1つ目は、get、go、take、come、run は多くの不変化詞と結合し多様な句動詞を構成すること、2つ目は、make、set、give は up との結合傾向が強いこと、3つ目は、work と carry は out との結合傾向が強いこと、4つ目は、move、come、fall は through、across、(a)round、back、in 等の場所の移動を表す不変化詞と結合する度合いが高いこと、5つ目は、動詞と不変化詞との結合パターンには、特定の組み合わせが高頻度で用いられるものと多様な組

み合わせが用いられるものと分類可能ということである。なお、set や carry では、句動詞として用いられる頻度が 50% 近くであり、英語教育の際にはこうした点を考慮した工夫が必要である。

質疑応答では、英語教育への応用の可能性について質問があり、英語学習者にとって句動詞を教える際、対応分析のプロット上で位置が近接しているものをまとめて教えると良いのではとの回答がなされた。また、他にも、対応分析のプロットの軸の解釈や句動詞の多義性等に関する多くの質問があり、本研究への関心の高さが伺えた。

保坂 道雄(日本大学)

#### 現代英語における there+be の文法化—歴史的発展の視点から

家口 美智子(摂南大学)

本発表は、*OED* に使われている例文を資料に、there+be が文法化をおこし融合し、unanalyzed chunk となる変化を考察しようとするものである。研究方法としては、*OED* から抽出した there+be のデータを、受動態と定名詞句、数の不一致の観点から分析する。まず、受動態で用いられる頻度では、*OED* において 1584 年に初出する there's は当時より受動態として用いられる例は少なく、文法化が進んでいたと考えられる。また、raising の割合が 1900 年以降急増することはこの時期に there に何らかの変質があったことをうかがわせる。次に、定名詞句との共起については、there's と there was の頻度が高く、there's に次いで there was もまた文法化している可能性を示唆する。数の不一致については、there's の頻度が圧倒的であり文法化の度合いが高いことを示している。文法化の要因についての考察では、頻度と文体が影響している可能性が高いと考える。特に後者では、there's と there is の使用に当たっては、involvement、affective、immediacy、interaction vs. detachment、expository、static の要因が関与し、there was と there is の使用では、Narrative vs. Non-narrative の要因が関与していると考えられるとする。

質疑応答として、there is と there's の転写について、transcriber によって歪められている可能性は無いかという質問があり、今後音声付きコーパス等の検討も必要であるという提案がなされた。また、it's の文法化に関しても研究を広げると良いとのコメントも頂いた。

保坂 道雄(日本大学)

### 日本人英語学習者の形容詞強意表現—NICE の習熟度別データの分析から

小島 ますみ(名古屋大学大学院生)

本発表は、学習者コーパス NICE(Nagoya Interlanguage Corpus of English)を対象に、初級、中級、上級日本人英語学習者の強意語句+形容詞の連鎖を分析したものである。この発表では、初級学習者、中級学習者、上級学習者それぞれの20ファイルを使用し、さらに英語母語話者コーパスからランダムに抽出された20ファイルを用いている。

学習者の使用する強意語句+形容詞の連鎖は、コロケーション・語彙の観点から、熟達度の向上に伴い、どのように発達するのかという最初の研究課題については、日本人英語学習者は熟達度が低い程、強意語句+形容詞の連鎖を過剰に使用する傾向が示唆された。また、学習者の強意語句は、熟達度の向上に伴い、どのような種類の強意語句が用いられるのか、という第二の研究課題については、上級学習者では、より母語話者の表現と類似した傾向が示されたが、強意語句のバリエーションが不足しており、強意語句+形容詞の連鎖であっても、母語話者のコロケーションとは異なる表現が観察された。

質疑応答では、「母語話者による誤用例のチェックは grammatical correctness に基づいているのか」という質問に対し、「それだけではなく、自然な英語であることを基準に行われている」という回答が得られた。また、強意語句(booster)も前置あるいは後置といった構造上の区別がなされるべきではないか、あるいは誤用例として挙げられた“an extremely good opportunity”の正しさの定義について等の活発な質問がフロアか

ら寄せられ、今後のさらなる研究成果が期待される。

小林 多佳子(昭和女子大学)

### 品詞連鎖に着目した日本人英語学習者の中間言語の特徴分析—学習者コーパス NICE を用いて

阪上 辰也(名古屋大学)

古泉 隆(名古屋大学大学院生)

小島 ますみ(名古屋大学大学院生)

杉浦 正利(名古屋大学)

本発表では、日本人英語学習者の中間言語の特徴を「品詞連鎖」の観点から明らかにすることを目的とし、学習者コーパス NICE(Nagoya Interlanguage Corpus of English)を利用して、母語話者コーパスとの比較から、日本人大学(院)生の書き言葉での品詞連鎖の傾向を明らかにすることを試みた。研究課題として、日本人中上級レベルにおいて頻度の高い品詞連鎖(trigram)は何であるか、正用・誤用を区別した場合、頻度の高い品詞連鎖は何かの2点が検討された。研究手法としては、学習者コーパス(NNS)及び学習者コーパスに付与された母語話者による添削文(CR)を用いて、NNS と CR の品詞連鎖を抽出し、さらに NNS に含まれる前置詞句を正用と誤用に分類し、品詞連鎖を抽出した。分析の結果、NNS と CR の品詞連鎖の産出パターンが類似している一方、前置詞句において誤用を含む品詞連鎖が占める割合は全体の約半数であり、前置詞句における正用と誤用の品詞連鎖の産出パターンが類似していることが示唆された。また、中上級レベルの学習者は、前置詞句を含んだ表現を多用しているが、NNS と CR の比較から、中・上級学習者は母語話者に近づいているように見えるが、誤用を踏まえると、必ずしも母語話者と同じ産出をしているわけではない。

発表後、NNS と CR との相関関係、母語話者による添削方法について、あるいは品詞別の頻度数であるコリゲーションを意識してデータを絞り込んでどうか、といった熱心な質疑応答が交わされた。本発表は、品詞連鎖を軸に学習者コーパスの特質に迫ろうとする充実度の高いものであった。

小林 多佳子(昭和女子大学)

## LDOCE3 における語用論的定義—特に談話標識に注目して

白土 淳子(北海道大学大学院生)  
園田 勝英(北海道大学)

本発表では、まず *LDOCE3* の機械可読版を用いて、当該辞書において語用論的情報がどのように提示されているのかを明らかにした。続いて、談話標識に焦点を絞り、*LDOCE3* が英語の談話標識全体をどのように記述しているのかをまとめた。本発表では談話標識の選定方法として、*LDOCE3* における語彙項目の中から、語用論的 *used* を含む定義文を分離し、選定基準に従い談話標識を特定したほか、それ以外の定義文の中からも同様に談話標識を特定した。

分析の結果、談話標識として特定した定義の総数は 169 であり、談話標識として特定した語彙項目の総数は 125 であった。内訳として *used* を含む定義は 130 であり、全体の 77% を占めている一方、*used* を含まない定義は 39 で 23% という数値となった。

本発表では、*LDOCE3* における定義の中では、字義的意味と語用論的情報が区別されており、特に語用論情報は必ず *used* で導かれること、*used* を含んでいる定義を精査することによって、多くの談話標識を特定することが可能になった反面、*used* を定義に含まない談話標識も少数あり、それらは特定の意味に集中していることなどが結論として述べられた。

発表後、接続詞と談話標識との区別について、また文頭に現れることが多い “I mean” などは話し言葉ではイントネーションが大切であるが、*LDOCE3* ではどのように区別したのか、“frankly” などが談話標識として排除されているのは辞書的に前後関係がないという理由からかといった今後の研究をより深める有意義な質疑応答が行われた。今後のさらなる発展が期待される発表内容であった。

小林 多佳子(昭和女子大学)



## シンポジウム

### ESP におけるコーパス活用の意義と課題

第 32 回大会でのシンポジウムは、「ESP におけるコーパス活用の意義と課題」と題して行われた。現在、ESP 教育や ESP 研究への関心が高まっており、本シンポジウムでは、理工系 ESP 分野を中心に、ESP におけるコーパス利用の意義を多角的観点から検討することが目的であった。シンポジウムは 2 部構成をとっており、概要は以下の通りである。

第 1 部「ESP におけるコーパスの意義—PERC コーパスを例に」

本年 6 月に公開された PERC コーパスについて、コーパス構築の背景・理念・手法など、PERC のメンバーでもある野口ジュディ津多江氏(武庫川女子大学)が、コーパスの概要を紹介した。ESP の観点から、*impact factor* 値を標本抽出の枠組みに用いたことなどが説明された後、PERC コーパスを用いた研究例も交えて、ESP 研究におけるコーパス利用の意義が具体的に示された。

第 2 部「ESP コーパスを利用した英語教育—様々な試み」

第 2 部では、ESP 教育に携わっている 3 名の試みが紹介された。「論文読解・論文作成のための ESP コーパスの利用」では、石川有香(名古屋工業大学)が、論文作成の必要性に迫られている工学研究科の大学院生に、コーパスの使用法を指導することの有効性を述べた。

「コーパスとしての Web resources の利用」では、野口ジュディ津多江氏が、ESP の観点から、高校生を対象とした場合であっても、Web を利用してコミュニティーで使用されている英語(実物教材)を提示してゆくことの意義を述べた。

「口頭発表のためのバイリンガル・コーパスの利用」では、国吉ニルソン氏(早稲田大学)が、口頭研究発表のムーブ分析研究の一端を紹介し、ESP 教育への応用の可能性を示した。

質疑応答では、ESP 教育の目的、教育手法、コーパスの指導について、フロアとの活発な議論が交わされた。

石川 有香(名古屋工業大学)

## ハンドアウトのダウンロードサービス

第 32 回大会の研究発表とシンポジウムのハンドアウトを希望される会員に対して、ダウンロードのサービスを行います。期間は、このニューズレターお届けより 12 月 25 までとします。ファイルは PDF となっております。ご希望の方は、石川保茂(yasuishikawa@hotmail.com)まで下記のハンドアウトのうちご希望の番号をお知らせください。追って URL をお知らせいたします。なお、発表者の著作権保護の立場から印刷は「許可しない」に設定してあります。

1. ワークショップ
2. 英国高級紙社説における人称代名詞
3. 句動詞における動詞と不変化詞の結合特性について
4. 現代英語における there+be の文法化
5. 日本人英語学習者の形容詞強意表現
6. 品詞連鎖に着目した日本人英語学習者の中間言語の特徴分析
7. LDOCE3 における語用論的定義
8. シンポジウム：ESP におけるコーパス活用の意義と課題

末尾になりましたが、資料を提供くださいました方々のご厚意に感謝いたします。

## 第 33 回大会研究発表募集

2009 年度春季大会（第 33 回大会）は 4 月 25 日（土）に神戸大学で行われる運びとなりました。つきましては、発表を希望される方は、下記の要領に従って email で事務局宛にお申し込み下さい。

[分野] 本学会にふさわしい、コーパス利用・コンピュータ利用を中心に据えた英語研究。

[応募資格] 本学会員であること。

[発表方法] 発表 20 分、質疑 10 分

[応募方法] 冒頭に題名のみを記し、800 字～1200 字（参考文献は別）にまとめ、メール添付ファイルで送付。メール本文に氏名（ふりがな）、所属・職名、住所、電話番号、メールアドレス明記。

[応募締切] 2009 年 1 月 5 日（月）必着

[採否決定] 2009 年 1 月末日（予定）

[問合せ] 〒175-8571 東京都板橋区高島平 1-9-1 大東文化大学 山崎俊次研究室 英語コーパス学会事務局  
Email: yamazaki@ic.daito.ac.jp

## 会誌『英語コーパス研究』第 16 号について

『英語コーパス研究』第 16 号（2009）について、ご報告いたします。

今回は、研究論文に 5 編の投稿がありました。過去数年と比較しますと、本年度の投稿数はやや少なめという印象を受けます。ちなみに、過去の投稿数は、15 号は 8 点、14 号は 12 点、13 号は 9 点でした。研究論文、研究ノートのみならず、書評やコーパス紹介、ソフトウェアレビュー、実践報告なども受け付けております。『英語コーパス研究』は例年 9 月末日が投稿締切ですので、次号には多くの投稿がなされることを期待いたします。

現在、査読審査を行っております。印刷、製本完了後、6 月頃の刊行を予定しております。

編集委員長 塚本 聡

## 『英語コーパス研究』の電子化について

学会 15 周年記念事業として、刊行済みの『英語コーパス研究』をすべて収録した CD-ROM がこのほど完成いたしました。本文すべてが PDF 化されたもので、検索機能も有しています。ご活用下さい。

編集委員長 塚本 聡

## JAECS 東支部活動報告

東支部の活動に関しては、現在「英語教員向けのコーパス講習会」等を立案中です。時期は委員会で決定はしていませんが、来年 1 月から 3 月の間に東京外国語大学で実施予定です。その際は、若手の学会メンバーに講師を依頼することなどを検討しています。今後のお知らせにご注意いただき、多くの会員が参加されることを期待いたします。

東支部長 投野 由紀夫

## 英語コーパス学会賞募集

第 8 回英語コーパス学会賞を募集いたします。学会賞は英語コーパス学会の活性化のために設けられた賞ですので、奮ってご応募ください。

学会賞選考委員長 投野 由紀夫

【対 象】英語コーパス学会の目的にてらし、英語のコーパス言語学に関する優れた研究業績をあげた学会員(個人またはグループ)とする。ただし、奨励賞は英語のコーパス言語学に関する優れた研究業績(論文の場合、学会誌『英語コーパス研究』に掲載されたものに限る)をあげた 35 歳以下または大学院修了後の研究歴 5 年以下の学会員個人に限る。

【応募方法】自薦、他薦を問わない。

【提出書類】1) 同封の推薦理由書。

2) 論文の場合は現物またはコピー。単行本の場合は事務局で用意するので送付は不要。

【提出先】事務局

【応募期限】2009 年 3 月 31 日(火)

【発 表】2009 年度秋季大会

## 2009 年度以降の大会日程と予定開催校

第 33 回大会 2009 年 4 月 25 日(土) 神戸大学  
第 34 回大会 2009 年 10 月 青山学院大学  
第 35 回大会 2010 年 4 月 兵庫県立大学  
第 36 回大会 2010 年 10 月 東京大学

## 新入会員紹介(11 月 25 日現在、S は学生)

内田 諭 東京大学大学院 S  
奥村 信彦 長野工業高等専門学校  
国吉 ニルソン 早稲田大学  
古泉 隆 名古屋大学大学院 S  
田地野 彰 京都大学  
照井 雅子 大阪大学大学院 S  
土肥 康輔 東京外国語大学大学院 S  
時国 滋夫 アットジェイ有限会社  
西村 祐一 名古屋大学大学院 S  
橋本 ゆかり 東京外国語大学大学院 S

東泉 裕子 東京学芸大学留学生センター

## 事務局から

### ◇会費納入のお願い

2008 年度会費(一般 5,000 円、学生 3,000 円)を未納の方は、郵便局にある払込取扱票を使いお納めいただきますよう、ご協力をお願いいたします。なお、郵便局発行の受領証をもって領収書に代えさせていただきますので、ご了承ください。領収書が必要な方は、80 円切手を同封の上、石川保茂(〒615-8558 京都市右京区西院 笠目町 6 京都外国語大学内)までお申し出ください。払込取扱票の通信欄によるお申し出はご遠慮ください。

過年度会費未納の会員の方々には「会費納入のお願い」を同封させていただきました。会費納入にご理解・ご協力いただきますよう、お願い申し上げます。なお、会誌『英語コーパス研究』第 16 号は 2008 年度の会費を納入いただいた方にも送付いたします。また、2 年続けて会費未納の場合、*Newsletter* などの送付を中止させていただきます。なお、会費納入などに関するお問い合わせについては、石川保茂(yasuishikawa@hotmail.com)までお願いいたします。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

## FORUM

EUROCALL 2008 に参加して

石川 保茂(京都外国語短期大学)  
yasuishikawa@hotmail.com

2008 年 9 月 3 日から 6 日にかけてブダペストから西に約 60km のセーケシュフェーヘルバル(Székesfehérvár)にある Kodolányi János

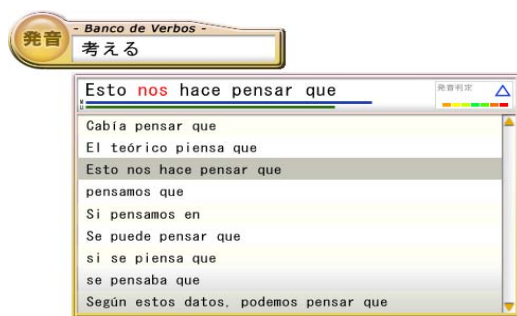
University College で開催された EUROCALL 2008 に、発表者として参加しました。ヨーロッパ各地、アメリカ合衆国、カナダ、中国、台湾、オーストラリアなど、世界各地から多数の研究者が集い、日本からの参加者も多数ありました。石川慎一郎氏（神戸大学）、石川有香氏（名古屋工業大学）、北尾謙治氏（同志社大学）、後藤一章氏（大阪大学）、小山由紀江氏（名古屋工業大学）、西納春雄氏（同志社大学）などが発表されました。

この学会は、名前が表す通り、ヨーロッパ各地を会場に、毎年8月下旬あるいは9月初旬に開催されています。昨年は北アイルランドの University of Ulster の Coleraine Campus で開催され、来年はスペイン Universidad Politécnica de Valencia で開催されます。昨年の学会では、初めての試みとして、paper のパラレルセッションでの発表の録音が行われ、現在、その録音音声ファイルが <http://www.eurocall2007.com/> からダウンロード可能となっています。今回の会場は、賑やかな旧市街を通り抜けて5分程歩いたところに位置し、9月初旬であったにもかかわらず、会場周囲の木々は色づきはじめ、秋の気配が漂っていました。

この学会では、3日の日中に Pre Conference Workshop が開催されたのち、夕方からの Educational showcase と Poster session を皮切りに、6日の午前中までに110以上の paper の発表が行われました。発表の内容は、CALL、WELL、TELL、CMC、LMS、CMS、e-learning、m-learning など、多岐にわたるものでした。学会の最終プログラムや各発表のアブストラクトは <http://www.asszisztencia.hu/eurocall/> に掲載されていますが、この紙面をお借りして、筆者が行った発表 “A pronunciation and vocabulary teaching aid for Spanish as a Foreign Language programs at Japanese universities utilizing a Spanish speech recognition system and corpora of academic Spanish”（発表者：石川保茂・立岩礼子・後藤一章・赤野一郎）について、その概略を以下に記します。

日本で出版されたスペイン語母語話者によるスペイン語論文をコーパス化し、そこから抽出した動詞リストに基づき選定した高頻度のフレーズを PC 画面上に提示したうえで学習者に認

識させるとともに、フレーズの聞き取り・発音練習の機会を与えることを可能にした装置の開発について発表しました。本装置で利用した音声認識システムは2種類あり、一つは日本人スペイン語学習者が苦手とするスペイン語の発音パターンをデータベース化して実装したうえで、端末 PC のマイクロホンから入力した学習者の発音を音響的に評定し、リアルタイムで発音上の問題を指摘する機能を備えているものです。もう一つは発話長認識システムであり、単音ではなく semantic unit を一つのセグメントとして認識するものです。つまり、教師音声と同じ速さで発話できているかどうかの評価基準であり、流暢に聞こえるスペイン語の発話練習を目的としています。以下に装置の画面を示します。



なお、この学会には3つのSIGがあり、コーパス関係のものとして CorpusCALL SIG があり、discussion list も開設されています。（残り2つのSIGは Computer Mediated Communication (CMC) と Natural Language Processing です）。ご興味がおあり方は次のサイトをご覧ください。  
<http://www.eurocall-languages.org/sigs/corpuscall.html>